



[Bonnes vacances!
良いバカンスを!]
photo by Saori

Parisien 突撃インタビュー

今月のお客さま

大塚 竜駆 さん

なぜパリで日本画？

ハトと花を愛する新鋭日本画家にインタビュー

今号では、グラフィックのお仕事をしながら、パリで日本画家として活動している大塚さんにインタビュー！大塚さんの絵のモチーフはハトと花。なぜパリで日本画を描いているのか？フランス人の日本画への反応は？また将来の野望までお聞きしました。



終わりのない奥深さに ハマる

◆日本画のお仕事について教えてください。

月に一枚は絶対描くようにしています。インスタで絵の依頼をいただいたり、グラフィックの仕事関係の方からイベントのコラボのお誘いがあることもあります。レストランやアソシエーションを使って発表したり、今年の初めにはみなとみらいでもグループ展に参加しました。

◆パリにきたのはいつ？

高校時代はアメリカに留学していたんですが、その後フランスに来たのが9年前です。ニューヨークにあるパーソンズ美術大学のパリ校を卒業しました。卒業後は高田賢三さんの家具ブランド「K3」で、デザイン画を何枚も描いたり、ルイ・ヴィトンで短期で働いていたこともあります。

◆いつから日本画を？

日本画は、学生の頃から興味があって、大学では日本画史を勉強していました。3年ほど前から1人で描き始め、日本画の先生のもとで勉強させてもらっています。描き方も独特なので、いわゆる日本の流派には入っていないですね。

◆なぜ日本画を選んだの？

自分が日本人で、それがアイデンティティのベースかなと思っているので。他も試してみましたが、日本画は色の繊細さも出るし、奥が深くて、常に学ぶところがあるので、終わりが無いのいいなと思いますね。フランス人には「何それ？」って最初に言われます。興味をもってもらえるし、絵を見せると「きれい」「うまいね！」とか、「何が違うの？」とかいろいろ聞かれます。

◆パリで日本画を描く理由は？

だって、日本で日本画をやったら埋もれません

か？僕みたいな鼻ピアスしてる日本人が気に入られるとは思わないです（笑）。料理と似ていると思うんですが、日本人がフランスに来てフレンチを学んでも、フランス人の作る本場の料理にはかなわないと思うんですよ。何をもってフランス料理というかということかな。日本人でももちろん有名どころもありますけど、そういう方は独自性を持たせているから強いわけであって。学ぶこと自体は本場でいいと思うんですけどね。

タトゥー屋で 学べたことって？

◆フランス語は堪能？

渡仏した頃はほぼゼロでしたが、地元のタトゥー屋に1年間勤めてフランス語が話せるようになりました。タトゥー屋はちょっとブラックでしたが、いい経験でした。デザインの他にも掃除とかいろいろなことをやりました。その後、京懐石料理でサービスとして働くようになったので、自分のフランス語のトーンを直したんです。タトゥー屋でのフランス語は、魚屋とか配達業の兄ちゃんとかに使えるんですけど、お客さんには使えないので。裏でもめ事とかあると、そういうトーンで強気に出れるんですけどね。コロってしゃべりかた変わりますよ（笑）。

◆ある一日の過ごし方を教えてください。

何も無い日は一日絵を描いています。朝は8時半頃に起きて、定番の朝ご飯を食べてシャワーをあびて、事務作業を午前中に片づけて、午後はゆっくり絵を描きます。日によりますが、昼はおいしい野菜や肉を買って、焼いたりソースで煮込んだり、時間をかけて料理をしますね。たまに休憩でセーヌ川沿いの自由の女神像まで散歩して

タバコを一服して帰ったり。そのあと夜12時～1時まで描きます。1人の時間も好きですが、友達やお客さん、ギャラリーのみなさんご飯を食べに行ったりすることもあります。人付き合いって何が起るかわからないというか、話が予想外に繋がっていくことも多いので大事にしていますね。僕は自営業者なので（笑）。

◆なぜハトがモチーフ？

ハトはどこにでもいるんですよ。ルーツをたどると、伝書鳩だったり、キリスト教だと神聖な動物として扱われていたり、人間の歴史と深いつながりがある。今のハトは嫌われ者なんですけど。あと、ハトって近くで見ると綺麗な個体が多いなと思うんです。

◆今後やりたいことは？

アーティストとしてきちんとやっていきたいのと、職人をサポートできるような立場の人間になりたいです。今の時代、AIが出てきたり、物の簡略化が激しいのに、クオリティは下がって、職人や、手を使う人の仕事なくなっている。器を作る人や、仏師とか塗師とか、そういう技を持つ人を一緒に仕事したり、展示会したりしたいなと思っています。フランスにもそういう人はいるので、ご縁があるところからやっていきたいです。

Instagram @ryukuotsuka.art



毎週土曜日あさ9時30分から、テレビ朝日で放送。tv asahi



食材ひとつに、多彩なドラマ。

毎週土曜日に放送中の「食彩の王国」は、身近な「食材」たちが主役。さまざまな食材が織りなす食文化の歴史や産地の風土…。そこに流れる時間をひも解くことで、人と食材のかかわりを探っていきます。

食彩の王国



語り 斎藤丸ひろ子

番組ホームページ www.tv-asahi.co.jp/syokusai

【制作】tv asahi テレビマンユニオン ViViA) 【企画協力】ビデオプロモーション 提供 TOKYO GAS

マダム愛のわたくし ミュラン

第151回

パリの隠れた名店で 繊細かつ完璧なコース料理を

パリの中心地から少し離れた静かな通りに佇むレストラン「TOWA」。ここは、日本人のご夫婦が営む特別な一軒です。シェフであるご主人は一流レストランで腕を磨いた実力派、そして奥様はパティシエとして同じく高い技術を持つお二人。そんなお二人が作り上げる料理は、コースの最初から最後まで驚きに満ちていました。

この日はコースメニューをいただきましたが、最初のアミューズブッシュから期待を大きく上回る美味しさ。どの皿も味付けはとても繊細でありながら、素材そのものの持ち味がしっかりと引き出されています。そして、それを引き立てるソースがまた見事。主張しすぎることなく、料理全体のバランスを美しくまとめ上げています。

友人のすすめでいただいたスペシャリテの「tourte de magret de canard」は特に印象的でした。パイ生地は驚くほどさくさくで香ばし

く、中はどっしりとした旨味が詰まった鴨肉。ジューシーさと火入れの完璧さに思わず感動してしまう一皿！魚料理もふっくらとした食感と旨味が口いっぱい広がるし、料理の構成、温度、香りの重なり方まで計算されており、シェフの技術の高さを感じます。そして最後を飾る奥様のデザートもまた素晴らしく、コース全体を優雅に締めくくってくれました。

観光地の喧騒から少し離れた場所にありますが、わざわざ訪れる価値のあるレストランです。パリで本当に美味しい料理を味わいたいなら、ぜひ足を運んでほしい一軒だと思います。

A. 「TOWA」という名前は「永遠」が由来とか。日曜営業も嬉しく、パリでは貴重な存在。 B. オーナー夫妻。それぞれが一流レストランで経験を積み、ご主人が料理を担当し、奥様がデザートを考案する。 C. 料理は美しく、味も素晴らしいだけでなく、シェフのこだわりや挑戦、そして高い技術力が伝わってくる一皿一皿でした。 D. スペシャリテの「tourte de magret de canard」はぜひおすすめしたい一皿。 E. デザートのレベルもとても高く印象的。

writer マダム愛

東京で知り合った仏人男性に連れ去られ、気が付けばパリジェンヌとやりに。パリのレストランと生活、2つのブログを書いています。

blog マダム愛の徒然パリ日記

<http://www.paris777.blog.fc2.com/>

blog マダム愛のアパートの鍵貸します

<https://www.madameai.com/>

今月のハート

料理 ♥♥♥♥♥
ドリンク ♥♥♥♥♥
サービス ♥♥♥♥♥
雰囲気 ♥♥♥♥♥
コスト ♥♥♥♥♥

TOWA

75 Rue Crozatier 75012
01 53 17 02 44
<http://towarestaurantparis.fr>



B



D



A



C

E

癒し系フランス男子ギョームの

パリで茶柱シルブプレ

水出し茶、1000人分!

「お茶な～に～? 日本茶ってな～に～? どんな味?」と小・中学生からたくさんの質問を受けた、ある金曜日のお昼。パリを拠点に、世界で活躍するシェフの廻神大地さんが企画された「日本食給食」がパリ郊外ブローニュ市のサンジョセフ校 (Saint-Joseph du Parchamp) で提供されました。サワラの西京焼き・鶏肉の照り焼き・野菜の胡麻和えやお味噌汁などが並び、「ああ、日本。」の一言。Chanoki からは、水出し茶を1000人分用意し、茶葉を見せながら振る舞いました。奈良県山添村「みとちや農園」 柘下夫妻の釜炒り茶・静岡県川根「静香農園」小西さんの和紅茶・石川県金沢市の茎ほうじ茶は、あっという間になくなりました。おかわりをする子、「このお茶も試してみたい!」と全種類飲み、このお茶は苦手。こっちが好き。」と感想を言いに来てくれる子ども達に囲まれ、大忙し! 「新しい1年」を感じさせる新茶が、少しずつお店に届いています。その新茶マラソンのスタートを切ったのは、静岡県本山「いはち農園」 繁田さんの煎茶と玄米茶。次のお茶はどこから届くのでしょうか? それでは à bientôt!



子ども達が来る前に準備中



子ども達に囲まれて



writer ギョーム・ユルボー

パリにある日本茶専門店「CHANOKI」店主。日本留学中に小笠原流煎茶道に出会い、その奥深さにハマる。お店では日本の農家から直接買い付けたこだわりの茶葉が味わえる。 Instagram @chanoki_paris HP <https://www.chanoki.fr/>

パリに暮らす猫パリにゃん・リリちゃんと
ゴキゲン指揮者キョーリのほのぼの生活

パリにゃん通信

猛暑のパリ!

きっと日本でもニュースになったかと思いますが、ヨーロッパは猛暑に見舞われパリも連日40度。古いアパートマンは冷房をつけられず、冷房がほぼ普及していないので、とにかく暑い! 我が家にはフランスの歴史的猛暑だった2003年に私が買った扇風機が一台あるのみ。23年前のオンボロ扇風機がいつ壊れるかヒヤヒヤだったので新しいものを買おうと思っても、ネットも店舗もどこも在庫切れ。扇風機争奪戦で暴動が起こったほどです。幸い、我が家は庭があり木陰は室内よりかなり涼しい(でも暑い!)。そんなわけで、旦那さんと私は水着を着てホースで水浴びをしながら、ほぼ一日リリちゃんと一緒に庭で過ごしていたのです。ニュースでは「2026年はこれからの数十年で一番涼しかった夏と言われるでしょう」だそうです…。いよいよ地球のどこにしようとかサバイバルな時代が幕を開けた気がしています! マンマミーア!



木陰で休むリリちゃん

writer 押田杏里

日仏混合アマチュア合唱団「パリ・アブリコ合唱団」を主宰する指揮者。パリで猫のリリちゃんと旦那様と「今を生きる」をモットーに暮らしています。 Instagram @abricotp

とびこめ! ミュゼのとびり

今更聞けないフレンチアート

木漏れ日で伝える夏の空気
ルノワールの視線

以前、このコーナーで、モネの「ラ・グルヌイエール」について書いたことがあります。

「ラ・グルヌイエール」とは、19世紀後半、第二帝政時代にパリ郊外の、セーヌ河畔に造られた水上レストランで、舞踏会場やボート乗り場も併設されており、レジャー施設のようなものでした。鉄道網が整備された当時のパリでは、週末になるとブルジョワジーたちは郊外へ出かけ余暇を楽しんでいました。

1869年の夏、モネとルノワールは、この「ラ・グルヌイエール」でまったく同じ日、同じ時間、隣に並んでキャンバスを広げました。彼らは当時まだ20代後半、屋外で刻々と変化する光をその場で描くことを試みていました。絵の主題は、

レストランのすぐ脇に設けられた、一本の木が立つ円形の人工島「ル・カモンベール」。モネは、風景の中に人物を溶け込ませ、自然と光の反射、水面に焦点を置きました。一方ルノワールは、カモンベール島をグッとズームアップし、人々の表情や衣装、その場の雰囲気を読り取った筆触でキラキラした光と共に捉えました。女性たちのおしゃべりする様子、楽しげな笑い声が聞こえてくるような、生き生きとした幸福感が溢れていて、後の作品、「ムーラン・ド・ラ・ギャレット」を連想させます。また、ルノワール特有の木漏れ日の表現もここからすでに始まっているようです。どちらも、刻一刻と変わる光の瞬間を、素早い筆致でキャンバスに留めようとしました。しかし完成した作品にはそれぞれの個性があり、切り取った「世界」が驚くほど違います。

「ラ・グルヌイエール」という地名は「カエル(grenouille)」に由来します。当時この水浴場に集う若い女性たちを指す俗称としても「grenouilles」という言葉が使われていました。



『ラ・グルヌイエール』オーギュスト・ルノワール/スウェーデン国立美術館

ルノワールは、彼女たちについて、とても気立ての良い人たちだったと語っていたそうです。こうした背景を知ると、ルノワールがカモンベール島に集う女性たちのドレスや表情を、生き生きと描いた理由にも頷けます。

writer 妹尾優子

仏語教師の傍、仏文学朗読ラジオ「Lecture de l'après-midi」の構成とナレーションを担当。美術史&日本史UP。日仏の文学からアートまで深掘りする日々。

HP <https://note.com/tabichajikan/m/md750819c9bc7>

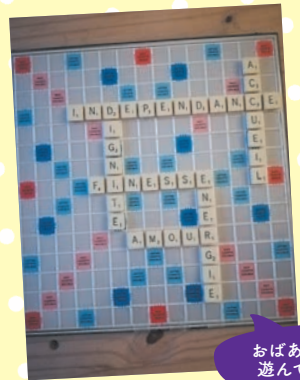
仏人添乗員リラの

日本リラ散歩



脳トレしながら遊ぶ

7月、8月といえば夏休みだが、今はバカンスどころか仕事とプライベートでバタ



おばあちゃんと一緒に遊んでいたScrabble

バタして忙しい時期。フランス人が好きなりフレッシュ方法は、友達や家族が集まって「アペロ」をすること。夕食の前に軽いお酒とおつまみをいただきながら会話してゆったりと過ごす特別な時間だ。特に暖かい季節は外でゆっくりするのが気持ちいいけど、最近の夏の気温がとんでもないことになっているね。

他にも一緒にボードゲームを楽しむのが好き。数年前に実家がおもちゃ屋さんを引き継ぐことになったというもあり、帰省するときに毎日ボードゲームだったり、カードゲームだったり何かしら家族で遊んでいる。お母さんはちょっと負けず嫌いな性格でいろんな意味で盛り上がるけど、やっぱり楽しい。

昔、毎年夏休みの間に2週間ぐらいおばあちゃんに会いに行っていた。その時も、必ず毎日「Scrabble (スクラブル)」をやって遊んでいた。アルファベットのタイルを使って言葉を作る、最大4人で遊べるクロスワードパズル型のボードゲームだ。使う文字とボード上での配

置によって得点を稼ぎ、点数が多いプレイヤーが勝ち。元々アメリカで誕生したゲームだがフランス語版もあり、かなり定番のボードゲームだ。フランス語を勉強している方はぜひ語彙の練習として遊んでみてほしい。母国語でも新しい言葉を覚えたり、難しい言葉のスペルを覚えるきっかけにもなる。90代のおばあちゃん、お父さん、弟と私で、3世代一緒に遊んで楽しい思い出になった。おばあちゃんが亡くなった時、何年も遊んできたそのScrabbleを引継ぎ、今はお父さん、弟と私でまだ一緒に遊び続けている。



writer リラ

東京で翻訳者としても活躍する30歳のフランス人女子。持続可能な社会の実現に向けての活動もする。趣味は編み物とベランダの植物の世話。

トモクンの

アレコレ、パリコレ、ナンジャコレ〜

作品発表の場としての橋

パリで1番古い「新しい橋=ポン・ヌフ」

シテ島の西端を挟んで、パリ1区と6区を結ぶ橋は、日本ではポン・ヌフ橋と呼ばれています。ポンは“橋”を、ヌフは“新しい”を意味し、直訳すると“新しい橋”。その昔、橋の近くでカラーセル麻紀さんが、“Shinbashi”というスナックで働いていたという話を聞いたことがあります。定かではありません。

それはそうと、橋だけを日本語化してヌフ橋と呼ぶのは何となく微妙です。ポン・ヌフだけだとそれが何だか全く判りません。ということで、日本ではポン・ヌフ橋という二重表現に落ち着いたのでしょうか。17世紀初頭に完成した、パリで1番古い橋が、実は“新しい橋”という意味を持つとはなかなか不思議です。

さて、そのポン・ヌフですが、幾度となく表

現の場となっています。古くは1985年のクリスト&ジャンヌ・クロードによって橋全体をラッピングするという芸術行動の場となりました。僕がパリにやって来た1994年には、高田賢三さんが私費を投じて32,000鉢のベコニアで飾りました。2010年にはデザイナーのジャン・シャルル・ドゥ・カステルバジャックが、ポン・ヌフを建立したアンリ4世の銅像をネオンでデコレーションし、2023年6月のルイ・ヴィトンのメンズコレクションのショーは記憶に新しいかもしれません。

そして今年の6月は、アーティストのJRによって橋の上に巨大な洞窟のオブジェが設置。実際に中に入ってみると、ただの空洞。「何をしたかったの?」という感じでしたが、「芸術とはそんなもの」なのかもしれません。1ヶ月のあいだ、左岸からしか渡れない、一方通行だったのは迷惑千万でした。芸術や文化事業という名の示威行為の餌食になっているのかもしれない。ちょっと可哀想なポン・ヌフなのでした。



writer トモクン

トモクンという名の45歳。在仏27年。ファッションジャーナリスト(業歴17年)は仮の姿で、本当はただの廃品回収業(業歴5年)。詳しくはブログ『友くんのパリ蚤の市散歩』にて。

blog 友くんのパリ蚤の市散歩

<http://tomos.exblog.jp>

予想を超えてくる
NY現地小学校の卒業

長女が現地小学校を卒業しました。予想以上に卒業式はカジュアルでした。まず親はほぼ普段着。アメリカ人の制服、パーカー姿も多数。私の前の席の家族なんて、野球帽を前後逆に浮かせて被るラッパーのいで立ち。後ろの人の視界のために帽子を取るなんて気づかいは存在しません。気になる卒業式の中身ですが、卒業生入場→センチメンタルな歌合唱→偉い人の長め挨拶→赤ん坊抱きて騒ぎ出す→隣の席の子どもtiktokを見だす→音量上げる→卒業生たち詩の朗読→tiktok音と混ぜて一言もわからない→卒業生が先生とツーショット写真撮影→終了。アメリカ人の小さなことは気にしないのが裏目に出ていました。長女は「寒かったから」とワンピースのポケットに手を突っ込んで不良風登壇、わざとぎこちなく歩いたりしてウケを取っていました。スーパーリラックス。式後は食堂で打ち上げ。国民食チョコチップクッキーと国民飲料レモネードが並び、子どもたちが食堂に入っ



てきた時は拍手で迎えられて、皆ハイタッチ。アメリカっぽい。

翌日は最終日。卒業式後に登校日があって衝撃でしたが、さらに、お迎えの時「何したの？」とワクワク聞くと、娘曰く「本読んだり絵を描いていた」？金八的なありがたい話は？人という漢字は？「先生の挨拶がなかった」そんなことある？ビックリしていると校庭に突然ティラノサウルスの着ぐるみが現れ、子どもたちがキャー！さすがアメリカの先生だなと思っていたら「トーマスのお父さんだよ」！ビルのワンフロアを保有し、クラスメイト全員をクリスマスパーティに呼んで本物のサンタまで手配したトーマス父。自らティラノサウルスを着て最終日を祝っている。お金持ちな上に、狂ってる。そこに痺れる憧れるう！

最終日だし、とそのまま学校近くの公園へ。クラスメイトのお母さんが「クラスのお母さんがピザをここに持ってくるらしいね」「そうなの？」「え？クラスのワッツアップで……え？入ってない？」えっ。ずっと連絡網を知らなかった？「だ、大丈夫！大好きだよ！」気まずいフォローありがとう。クラスメイトの親御さんたちに、1年間会釈して仲間意識を持っていたつもりだったけど、一方通行だったとは――。

writer 吉野亜衣子

ラジオ局を辞め、夫の留学についてパリへ。帰国後、日仏文化交流のための NOISSETTE を設立。2022 年で設立 10 周年。2024 年春より NY 在住。

HP <https://note.com/noisettepress>

podcast <https://podcasters.spotify.com/pod/show/cafenoisette>



▲前は見づらい席でした

▼卒業証書は打ち上げ中先生がホイホイ渡してました



本ソムリエ・ムッシュブルドンの

トレヴァン・ファクウェル

ジャン・レノ、小説家デビュー！

国際的に人気を集める俳優ジャン・レノの、小説家としてのデビュー作『エマ』の日本語訳が刊行された！

フランス語訛りのせいで<ジョン・レノン>と聞き間違えられる時以外は、ジャン・レノと言えば『レオン』の同名の暗殺者、『グラン・ブルー』の辛口のエンゾが彼の最も代表的な役かもしれない。リュック・ベッソン監督によるこの2本の映画で見た演技のおかげで、ジャン・レノは高評価を得て、年月を重ねながらたくさんの監督の様々な物語に息を吹き込んでいった。だが、彼はこんなふうに映画のなかで他人の話を聞いていくうちに、自ら話を語りたくなったという。今になって、観客が今まで見たことのないジャン・レノの別の一面を見せることになったのだ。

自分の専門と違う領域で活躍すると怪しむのがフランスの評論界。その現実を無視して、俳優としてもう何も証明することがないジャン・レノが70代になってまさかの小説家デビュー！文学に突入したといっても、『エマ』のあらすじがわかれればジャン・レノは自分のなじみの領域で活躍して

いることが分かる。ブルターニュ出身の主人公エマはオマーンのタラソセラピーセンターで働き始め、そこでオマーンの大臣の息子と恋に落ちる。そして、意図せずしてフランスのスパイになってしまう。愛する人とフランス、どちらに仕え、どちらを裏切るか、彼女は選択を迫られることになる。

最近のジャン・レノが挑戦しているのは、歌を交えながら自分の歩んで来た人生を語る『ラクダ・Le chameau』というワンマンショー。今年始まったこの舞台は、なんと日本からツアーを始動するという！テレビCMで国民的キャラのドラえもんを演じたこともある彼の日本人観客への恩返しといえるだろう。舞台で猫型の未来ロボットの裏話もあるかな。

writer ジャンマリー・ブルドン

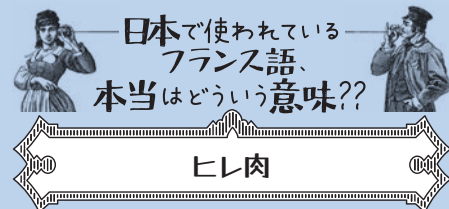
福岡在住のフランス人。福岡で仏語教室やフランスに関わるイベント企画を通してフランス文化普及に貢献する。Nautilus 主宰。

Instagram @libr_nautilus



『エマ』

ジャン・レノ 作/平岡敦訳/U-NEXT



フランス語のフィレ (filet) から来ています。ヒレカツはフィレカツです。フランス語では切り身肉のことを指していて、魚のおろした身もフィレです。お魚の泳ぐのに使うヒレとは違うの。混乱する。ちなみにフィレは網や紐のことも指します。マクドナルドのフィレオフィッシュも元々はフランス語のフィレから来てるってことですね。

ノアセットプレス公式ポッドキャスト
「カフェノアセット第39回」より編集部が抜粋し要約。

編集後記 ★ついに夏休み！私は最後の日本語クラスを終えて解放感を味わってます！そしてホーチミンでようやくフランス関連の人々と知り合うことができそうです。フランス語でできないけど、なんとかしましょう！（編集Y）★今年のヨーロッパは酷暑のよう。TVニュースでは、セーヌ川に飛び込む人や、パリの家電量販店で扇風機の箱を奪い合う人々の姿が…。40℃じゃ無理もないよね、と思いつつ、ちょっと衝撃。(AD.F)

